

# そうだ、猫に聞いてみよう No. 3



小池 英梨子

## 前回のおさらい

前回までの連載では、猫流の「問題の本質の捉え方」を書かせていただきました。

おさらいすると・・・

### ☆問題の本質を立体的に捉えるポイント☆

- ① 悪者探しをしない
- ② 3つの視点で捉える
  - ・ミクロな視点で見えているものを理解する
  - ・メゾな視点で全体図を捉える
  - ・マクロな視点で、社会システムの中で捉えなおす
- ③ 背後ストーリーを理解する

以上3点のステップが猫流問題の捉え方でした。その中で「①悪者探しをしない」「②3つの視点で捉える」を書いてきましたので、今回は、「③背後ストーリーを理解する」ことをメインに書いていきたいと思います。ですが、その前に前回書きそびれてしまった活動を通じた学生の心理的変化や、大学猫活動の教育的意義について少しふれておきたいと思います。

### 学生の行動変化

2014年8月、RitsCatの餌やりを観察していました。その日は学生4名で餌やりを行っていました。一回生は餌やりの最中、猫が気に入り、至近距離で餌を食べる猫を観察しています。すると、猫も人が気に入り、パッと食べるのを止め、餌皿から離れてしまいます。するとすかさず、一回生は餌皿を持って「もっとお食べ」と猫に近寄っていきます。それを繰り返して下級生の餌やりはど

んどん移動していきます。

「もっとお食べ」という物理的な距離を縮めることで、心理的な距離も縮めようとする一回生の気持ちは、猫にはなかなか届きません。心理的な距離は逆に開いていってしまいます。一方、四回生の餌やりは、餌皿をおいてちょっと離れたところで雑談しながら見守っていました。すると猫も安心して、しっかり食べます。ちょっと休憩してもまた自分で戻って食べ始める。

この猫にとって安心な距離感をRitsCatの学生は無意識に学んでいくのでしょうか。この気づきを四回生に話すと、「確かに」と納得してくれました。ということは、意識して取っている行動ではないようです。でも確かに行動は変化しています。猫との関わりを通して、無意識下に学習している。一回生の行動は猫に対してもっと仲良くなりたい、なれるはずだという“共生”への憧れと自分と同じ感覚を抱いているはずだという“共感”の勘違いを含んだ行動のように感じます。対して、四回生の行動は過干渉にならず、無理に懐かせようとしません。人の感覚で見ると、興味が無い、冷たいなどと捉えられるかもしれませんがね。人の願望でいえば、ポケットモンスターにおいてピカチュウがサトシの肩に乗るように、風の谷のナウシカの肩にキツネリスが乗るように、会話はできなくても一緒に冒険し、共に生き共に感じるような、絆で結ばれた関係性に憧れます。しかし、実際は自分の価値観を押し付けず、相手の価値観や世界観、距離感を尊重した行動を取れるようになるという事が必要で、それは対動物だけでなく人間同士の関係においても重要な要素だと思います。これが、日常生活にも般化するためには、こういっ

た無意識の行動変化をフィードバックし、意識化する手伝いをしてくれるような先輩や顧問がたしたら、大学猫活動を教育的意義を持つ素晴らしい学びの場にすることもできるのではないかと感じます。

### 背後ストーリーを理解する

猫の問題なんて餌やり禁止したらおしまいでしょう。本当にそうでしょうか。それでいのでしょうか。今起きている現状の問題点だけに焦点を当て判断するのではなく、こういった現状に至るまでの歴史的な経緯を理解することが問題の本質を捉える上で重要なポイントです。餌やりを禁止する理由は大きく分けて2つ。1つめは、餌をあげるから猫が集まり、繁殖し、増える。というもの。もう1つは、ペット以外の生き物にむやみにえさを与えるべきではない。という理由です。

では、猫の背後ストーリーを頭に入れてから上記の理由を再検討してみたいと思います。猫の歴史をさかのぼれば、外国から渡ってきた動物であり日本古来の野生動物ではないことが分かります。野生動物であればむやみな干渉や餌付けはNGですが、猫は事情が違います。また、ノラ猫の問題をさかのぼれば、そもそも猫を捨てた人に大きな問題があります。また、捨て猫は立派な愛護動物遺棄であり犯罪ですが、それを取り締まらなかった警察や行政、施設管理者の問題もあります。それを今現在、餌を与えている人と、猫にすべての責任を負わせることは問題の本質を捉えているとは言い難い。

猫が抱えている背後ストーリーを理解することによって、より現状が見えてくると考えられる。「猫に餌をやらないでください」という看板をよく目にするのがあった。だが、最近は「猫に餌をやるなら不妊手術をしてください」や「餌をやる時は後片付けまで」といった看板や「猫の遺棄虐待は犯罪です」といった看板を目にする機会が増えたと思う。一見同じような内容でも、その言

葉が持つメッセージは大きく違いますね。

さて、3回の連載に渡って長々と、どんなふうの問題を見ているのかを書いてきました。本当はやっぱりここから、具体的なエピソードを綴っていきたいと思っていました。ですが、諸事情によりしばらくは仕事に専念することになりました。したがって、連載は、しばらく休載させていただきます。始まったばかりなのに申し訳ありません。経験を積んでパワーアップして対人援助学マガジンに帰ってきたいと思います！次の頃にはもっと、こう短く簡潔に文章をまとめられるようになりたいです（笑）

では、読んでくださった皆様ありがとうございます！また、紙面でお会いできる日を楽しみにしています。

小池英梨子……………  
2015年立命館大学応用人間科学研究科修了  
現在は、公益財団法人どうぶつ基金に所属。  
……………



題「FAXと猫」

※連載とは何の関係もありません。